

第二十一章 金売り吉次

数日後、義経の命令で河越に行った伝令が戻ってきた。

伝令が、郷子に伝えた内容は義経が都を落ちたために傷ついた心をさらにえぐるような厳しいものだった。[河越重頼の所領が頼朝によって没収されたので、郷子が河越に帰っても居場所がないので、迎えにこれない]というのだ。頼朝の義経^{ちゅうぎつ}誅殺の命令に従わなかったことに対する報復に違いないが、頼朝の性格を考えると、所領の没収だけですまないかもしれなかった。父の身が危なかった。父の忠誠心が疑われたわけだから、郷子が義経と離縁^{りえん}すれば、父が許されるという単純な問題でもなくなったことは明らかだった。

北条時政の大軍は、もう十日もすれば都に到着するだろう。一刻の猶予もなく、早急に身の振り方を考えておかねばならなかった。

そんな時、郷子は、堀川館に留守居役として残された重平から相談にのって欲しいとの連絡を受けたので、志乃に赤子を預けると、従者を連れて堀川館に行った。

重平は、郷子の顔を見るとほっとした様子だった。

「お待ちしておりました。判官さまが何のご指示もなされないままに突然出立されましたので、今後どうすれば良いか判らずに困っておりました。主人である判官さまがいませんので、正室である郷姫さまに決めていただきたいとおもいます」

「そうですか。ではいま、この堀川館に残っているのは、何名ですか」

「武士は、留守居役のわたしと伝令から帰ってきた若い侍の二人で後はすべて判官さまと一緒に出立しました。そのほか、侍女、雑仕女、下僕、下婢など十二名が残っております」

「食料の備蓄はどのような状態ですか」

「判官さまは、必要最小限度の食料しか携帯されませんでしたので、まだ、相当量残っております」

(六条堀川館と室町亭は、もともと源氏の居館だった。だから、頼朝の代官である義経が居なくなれば、すぐに代わりのものが来るに違いない)

「北条時政殿が近日中に入浴されますから、それまでは今まで通り生活し、時政殿にご指示を仰がれたらどうでしょうか」

「判りました。有難うございます」

「わたしは近いうちに室町亭を出る事にしています」

「そうですか。残念でございます」

重平は、気の毒そうに言った。彼の意図は、郷子の退去を促す意味があったのだ。ただ、今までの主人が没落したからといって、その正室を追い出したような形になるのを避けるために、郷子の指図を仰ぐという方法を考えたのだろう。

郷子が、重平の見送りを受けて、玄関までくると、入れ替わりに小具足^{こくそく}を着け太刀^はを穿いた五人の侍が正門から入ってきた。そのうちの頭目らしい男が重平に言った。

「今日からこの館は俺達が支配する」

「ええ！、あなた達は何者ですか」

「俺達は、土佐坊昌俊殿の配下のものだ。鎌倉殿の御命令で義経の誅殺にまいった。昌俊殿は殺されたが、俺達の任務はまだ残っている。義経は都を落ちたがまた戻ってくるかもしれぬ。だから俺達がこの館を支配することが必要だ」

土佐坊昌俊が堀川館に夜襲を仕掛けてきた時に、義経と側近が討ち漏らした侍のうち、いままで密かに都に潜んでいた者だろう。農民などから借り集められたにわか侍で度胸がなく逃げ足が速いくせに、弱いもの相手だと空威張りする連中だ。

郷子は、義経を誅殺するためにきた侍と知って、猛烈に腹が立った。

「義経を誅殺にきたお前達にこの屋敷は渡せぬ」

郷子は、声を張り上げて凜とした態度で言った。

侍達は、一斉に郷子を見たが、若い女だと判ると頭目が偉そうに言った。

「お前は誰だ」

「義経の正室です。義経は、まだこの館を放棄したわけではありません」

頭目は、にやりと笑った。そして、配下を振り返りながら言った。

「ここに義経の正室がいたぞ。こいつを捕まえて北条時政殿への土産にしようではないか」

郷子は、重平と伝令から帰った若侍を見たが、二人とも郷子を守る様子ではなかった。[鎌倉殿の御命令]という言葉が利いているのだ。

郷子は、すばやく後退りすると、身を翻してもと志乃が使っていた居室に駆け込んだ。そこには、弓矢と短刀と木刀が以前のまま置いてあった。郷子は、木刀を掴み取ると後を振り返った。五人の侍が、部屋のなかに殺到してきた。郷子は、木刀を正眼に構えた。

「かまわぬ。切つてしまえ」

頭目が怒鳴った。

五人の侍は、刀を抜いた。一人が郷子を甘く見て無造作に切りかかってきた。郷子は、木刀でその刀を横に払うと、隙が出来た頭に木刀を思い切り打ち込んだ。男の頭蓋骨がいやな音をたてると、血がぱっと噴出した。男はそのままぱったりと足下に倒れて動かなくなった。これを見て残りの四人は、青くなって腰が引けた。

頭目が、配下を鼓舞して言った。

「いいか、俺が合図したらみんなで一斉に撃ちかかるのだ。四人で掛ければ大丈夫だ」

その時、隣の部屋の襖が開くと手に太刀を無造作に下げた須美が入ってきた。

「待ちなさい」

頭目が、振り返って須美に気がつくと言った。

「須美殿ではないか。これは心強い」

須美は大倉御所では有名な侍女なのにちがいない。

郷子は、観念した。須美が相手では勝ち目がない。

須美は、無表情のまま刀を振り上げると、頭目を一気に切り下げた。

「なぜ？」

頭目は、驚愕の表情を残したまま息絶えた。須美は、返す刀で逃げ出そうとした残りの三人をあ

っという間に切り倒した。

須美は、恐る恐る様子を見にきた重平と若侍の方を向いた。

「この五人を庭の片隅に密かに葬^{ほうむ}ってください。それから、ここで争^{こんせき}った痕跡をすべてなくすのです。もしここで起こったことを他言したらあなたたちもこうなりますよ。他のものにもよく言い含めて置いてください」

重平と若侍がうなずくと、須美は刀をそこに投げ捨てて、郷子に害意のないことを示した。郷子も、木刀を下に捨てた。だが、郷子はまだ半信半疑だった。

須美は、息もみださず何事もなかったかのように郷子に笑顔を見せた。

「どうぞこちらへ」

ふたりは、須美の部屋に入った。郷子は、初めてだった。毘沙門天の画が掛けてあった。ふたりが向かい合って座わると須美が褒めた。

「見事なお手並みでございました」

「いいえ、あなたの技量には、とても及びません。でもなぜあの四人を切ったのですか」

「わたしは、郷姫さまの侍女でございます」

「鎌倉からの指示を受けて動いているものと思っていました」

郷子は、率直に言った。

「申し訳ございませんでした。ご推察の通りでございます」

「それでは、わたしを助けたのも鎌倉の指示なのですか」

「御台所さまから、郷姫さまを守るようにとの御指示がございました」

「政子さまから？」

「大姫さまが御台所さまに、『郷姫さまを必ず助けて欲しいのです。それは夢に出てきた義高さまの強い要望でもあります。義高さまはもし郷姫が死ぬような事があれば、自分の霊が浮かばれず成仏できないと嘆いておられました。その時には、義高さまを殺した父を決して許しませんから』と申されたのだそうです。御台所さまも大姫が気鬱の病から回復されたのは、郷姫さまのおかげだと感謝されております」

「・・・・・・わたしは室町亭にこのままいてもかまわないということですか」

「御台所さまが、おっしゃるには、『郷姫を守る事は父の北条時政にも話してある。ただし、御所さまに知られては困るので、一応しかるべき所に身を隠して欲しい』と」

「判りました。政子さまの御厚情に感謝いたしますとお伝えください」

「そうお伝えいたします」

「ところで義経の事は何か聞かれていますか」

「大江広元殿が『義経殿には、まだまだやってもらわねばならないことがある。その前に捕まってもらっては困る』と申されているよしでございます」

「まだまだやってもらわなくてはならないこととは何でしょうか」

「恐らく守護・地頭の定着でございましょう」

「・・・・・・」

「義経殿が、何処に逃げるかを見張るために、鎌倉は諸国に守護・地頭を置くことを法皇に認めさせるつもりです。義経殿がすぐに捕まってしまえば、守護・地頭を置く名目がなくなってしまいます。それで、すくなくとも一年以上は逃げ回ってもらわなくては困ると。その間に、守護・地頭の役目が定着して、諸国を実質的に支配する体制が確立出来るとのことでございます」

大江広元の考えそうな、人を道具のように扱う陰険なやりかただった。

「では、守護は義経を見つけても捕まえないということですか」

「義経殿一行は、大物ノ浦で遭難したあと、山伏姿に身を隠して吉野山に向かっているとの情報がすでに入っています」

「情報は掴んでいるが、捕まえないということですか」

「捕まえる振りをしておいて、取り逃がすということです。それにもう義経殿の逃げ道も行く先もはっきりしているのだそうでございます」

「逃げ道も行く先もですか」

「北陸道を通って、むかし世話になった奥州藤原氏に逃げ込むに相違ないと」

「すると北陸道を一年以上かけて逃げさせて、最後に奥州藤原氏に追い込むということですか」

「それが大江殿の策略です」

「義経が奥州藤原氏に着いた後鎌倉はどうするつもりなのでしょう」

「義経殿を匿ったと言いがかりをつけて討伐するのでしょう」

「まあ！ひどい話」

「わたしも義経殿を気の毒に思いますが、わたしは御台所さまの御指示に従うだけでございます。ただ、事実を知っていただいたほうがよろしいと思い正直に話しました」

「率直にお話いただいて感謝いたします」

「それで、郷姫は実家の河越に帰るお気持ちはあるのですか」

「伝令が申しますには、河越領は没収されて戻る家はないとのことでした」

「わたしが聞きましたところでは、頼家さまの乳母をされています河越御前に没収された所領の半分が返されるとのことでした。また、河越御前は地頭に任命されるという話も聞いております」

郷子は、それを聞いて心底ほっとした。

「すこし安心しましたが、わたしが河越に帰れば、父母に迷惑が掛かるといけませんから、実家に戻るつもりはありません」

「それでは、何処かに身を隠せる家の心当たりがありますか」

「義母の常盤御前から、陰ながら助けるが、一条の家に匿うのは難しいといわれました」

「その他に心当たりの家がありますか」

「いえありません」

「義経殿が、奥州藤原氏に落ち着かれたら会いに行くお気持ちがありますか」

「義経とは、生死を共にする覚悟しております」

須美は、困ったような顔でしばらく郷子を見ていたが思い切るように言った。

「それでは、金売り吉次の屋敷に匿ってもらうのが良いでしょう。吉次は義経殿が好きですから、義経殿の妻子であれば喜んで匿ってくれるでしょう。義経殿が落ち着いたら、彼があなた方を奥州藤原氏に連れて行ってくれます」

「わたしを匿って吉次殿にご迷惑がかからないでしょうか」

「それは、御台所さまのご意志をお伝えし、北条時政殿も事情を知っていることが判れば問題ないとおもいますよ。わたしから、吉次にその辺りのことをよく説明しておきましょう」

「よろしくお願い致します」

「郷姫の侍女としていままで何も出来ませんでした、初めてお役に立つことができ、わたしも心の重荷が取れたような気がします」

「須美殿は、これからどうされるのですか。鎌倉へ帰られるのですか」

「鎌倉は、平家の焼け跡の六波羅へ大規模な屋敷を建設中でございます。鎌倉が幕府を開設するにあたって、六波羅は都での探題たんたいと呼ばれる出先機関になることになって居ます。探題では、政務や訴訟の裁断、軍事を司ることになっていますから、わたしがそこに居れば、郷姫の安全を密かに見守る事が出来ます。それが御台所さまのご指示でございます。ただ、御所さまか時政殿から、鎌倉へ帰国せよという御命令があれば、そちらを優先しなければなりません。」

郷子は、堀川館をでて室町亭に戻りながら須美のことを考えた。

(須美は、あの日、土佐坊が堀川館に夜襲を仕掛けることが判っていて、郷子の出産にかこつけて室町亭に来ていたのだ。もし、堀川館に留まっていたら、土佐坊から助力を求められるかもしれないからだ。須美は、鎌倉と政子さまとの間に挟まって、難しい舵取りを求められているのに相違ない)

室町亭に着くと志乃が、泣いている赤子を抱きながら迎えに出てきた。

「ちょうど良いお帰りです。義姫さまがすこし前に泣き出したところです。おむつは替えましたが、どうやらお腹が空いているようです」

「ありがとう」

郷子は、赤子を受け取ると、胸を開いた。赤子は、乳房に吸い付くと無心に吸い始めた。郷子は、張った乳房を吸う赤子の唇の感触と乳が抜けていく快感を感じながら、この子の命はどんな事があっても守ると心に誓った。

郷子は、志乃に堀川館での出来事を手短かに話した。志乃は、目を大きく開いて驚いて聞いていたが、最後に言った。

「それでは、吉次の屋敷に匿ってもらえるのですね」

「須美殿が、交渉してくれるとのことでした」

「それでは、わたしもご一緒いたします」

「いえ、もうこうなった以上、あなたが侍女としてわたしに仕え、苦勞されるるいわれはありません。実家にお帰りになったらいかがでしょうか」

「わたしには、もう帰る実家などありません。どうぞ、今まで通りに使ってください。そうでないと路頭に迷う事になります」

「そう言って頂けると、わたしは有難いのですが・・・危険があるうえ、十分に報いる事ができないかもしれません」

「それは承知の上でお願い致しています」

「判りました」

二日後、金売り吉次から迎えの者が来た。

郷子と義姫と志乃は室町亭を夜の闇にまぎれて密かに出ると知恵光院通沿いにある吉次の屋敷に移った。吉次の所有する広大な敷地には、大きな母屋の他に沢山の離れが建っている。吉次の商売を支える使用人や護衛の侍の宿舎などのほか、遠くから来た顧客の宿所になったりする。また、吉次が商売で移動する際に金を払って同行する女性の旅人なども泊まっている。とにかく吉次の屋敷は、多くの人が入り出るので、見知らぬ人がいても不審がられるような事がなく、隠れ家としては最適な環境にあるようだ。

迎えの者は郷子と志乃を敷地の隅にある目立たない離れに案内した。外見上は平凡で目立たないが、一歩家の内側に入ると檜をふんだんに使った豪華な造りになっていた。部屋数も四部屋と多く、台所、湯殿、廁が揃っており、家から出ずに長期間生活するのに最適な住環境が整っている。聞くところによると、むかし吉次の妾がいた離れだという。郷子も名目上は、吉次の妾として匿われることになるらしい。外に情報が漏れるのを防ぐために、下男や下婢もおかずに、志乃が炊事、洗濯、掃除などを受け持つ事になったが、志乃は武家の妻だった頃の経験を生かして、問題なくこなした。食料と水は、口の堅い下男が必要の都度準備してくれた。

郷子たちが、何不自由なく生活し始めて、すこし落ち着いた頃、夜陰にまぎれて、一人の男が家を訪問した。

「ごめん」

志乃が挨拶に出ると男が言った。

「吉次信高です」

吉次は外見は柔和だが鋭い目を持った五十年配の男だった。大きな商売をし、多くの人を使っている者特有の自信に溢れた落ち着いた雰囲気を持っている。

志乃が鄭重に吉次を奥の部屋に案内し、郷子に声を掛ける。

「吉次さまがいらっしゃいました」

郷子は、娘を寝かしつけていたが、あわてて振り返ると丁寧に挨拶した。

「この度のご厚情を心より感謝いたしております」

「いえいえ、須美殿から話は良く伺っています。ここに居れば心配する事はなにもありませんよ。これが、義経殿の娘さんですか」

「義姫と申します」

「良い名前ですね。それにしても月日の経つのは早いものですな。遮那王と呼ばれていた義経殿を奥州藤原氏にお連れしてから、もう十一年も経つのですから。実は、その当時秀衡公から源氏の御曹司を探だして奥州へ連れてくるようにと頼まれていたのですよ。平家の横暴が目にも余って危険を感じたので、恩のある源氏を担いで対抗するつもりだったのです。鞍馬山で義経殿を見つけたと

きは、嬉しかったですね。あの頃は、負けん気の強い元気な若者で、口癖のように清盛を討って、父母の無念をはらすのだと言っていましたな。

義経殿を連れてゆくと、藤原秀衡公^{ひでひら}が大層喜んでくれました。御礼に象嵌塗りの箱一杯の砂金、白なめし革百枚、鷲の矢羽百組、銀張りの鞍をのせた駿馬三頭を頂きました。秀衡公の気前のよさに驚きましたが、それだけ感謝してくれたのでしょう。その背景には、自分の後を継ぐ息子達になにか頼りないものを感じていたからでしょう。秀衡公は、義経殿をまるで自分の実の子供のように愛しんでいましたよ。それで、義経殿が兄頼朝の旗揚げを聞いて、奥州を飛び出していったときには大変残念がっていました。だから、義経殿が平泉に着たら歓迎することは間違いありません。まあ、適当な時期を見計らって、あなたを平泉にお連れしますから、それまでここで育児に専念してください」

「よろしく願い申し上げます」

郷子が礼を言うと、吉次は、商人らしく身軽に腰をあげると家を出て行った。

(吉次は、利で動く人のようだが、成功した商人らしく一本筋を通した義理堅いところもありそんな人物だ。それに子供のころ世話をした義経をまだ好いていることも確かなようだ。それに秀衡からの恩賞も期待できるに相違ない) 郷子は、吉次を信頼することにした。

吉次の屋敷の直ぐ近くに、内野八幡宮がある。吉次によると遮那王^{しやなおう}が奥州平泉に出発するにあたり、そこで道中安全を祈願したという。その話が伝わると「首途八幡宮」と呼ばれるようになった。[首途]とは[出発]の意味で、旅立ち、旅の安全に御利益がある。

郷子は、夜が明けてまだ人が起き出さないうちに屋敷を出ると、この神社の鳥居を抜け駒犬の前を通って本殿に向かい、義経の逃避行の安全を祈願するのを日課とした。京の冬の寒さは一段と厳しかったが、昔やった剣術の朝稽古や三日月の朝の乗馬で慣れていたので苦にならなかった。

遠からず北条時政が約千騎の大軍を率いて上洛して六波羅に入った。

時政が行家・義経に出された頼朝追討の宣旨の件で、頼朝が激怒している事を院に伝えたと、朝廷はあわてて頼朝に義経追討の宣旨を出した。吉次がどこからかその写しを入手すると郷子に見せてくれた。

文治元年十一月二十五日 宣旨

前備前守源行家・前伊予守 義経、反逆をたくらみ、ついに西海に赴いた。

しかるにたちまち逆風の難にあい漂没したという説ありといえども、存命の疑いなきに非ず。従二位源朝臣頼朝に命じて、在所を尋ね捜し、宜しくその身を捕らえるべし。

藏人頭右大弁兼皇后宮亮藤原光雅奉る

一ヶ月前に出した宣旨とまったく逆の内容である。朝廷の節操のなさは驚くべきものである。また、守護・地頭の設置と兵糧米の徴収も正式に認めたという。